

創立70周年を迎えて



公益社団法人日本鍼灸師会 元会長 **相馬悦孝**
 公益社団法人日本鍼灸師会 元会長 **仲野彌和**
 公益社団法人日本鍼灸師会 前会長 **小川卓良**
 公益社団法人日本鍼灸師会 会 長 **要 信義**

司会：公益社団法人日本鍼灸師会
 広報普及IT委員会 委員長 児山俊浩

公益社団法人日本鍼灸師会
 創立70周年記念事業実行委員会 委員長 大口俊徳

司会 相馬先生は「国民の保健への貢献・奉仕」をテーマにされていましたが、具体的にどのようなことを推進されたのですか？

相馬 何と言っても症例検討会が私の大きな柱だったと思いますね。国民の保健への貢献・奉仕ということは、鍼灸師がいかにか医療に取り組むか、医療という使命を担うか、というようなことだと思います。国民から安心して信頼されて臨床に当たれる鍼灸師を作り上げなきゃいけない、またそういう雰囲気を作っていかなきゃいけない、そのような気持ちで取り組んでいました。

司会 仲野先生は普及啓発活動に積極的に取り組まれましたが、日鍼会としてあまり得意としない分野で、どのようなご苦労がありましたか？

仲野 デザイナーやコピーライターなどプロの力も借りて、木更津の干潟の写真を使ったポスター画像を掲示（7作品）を作りましたね。「澱」体から、澱みが消えていく。「乱」体のなかの、乱れが静まっていく。「曇」体の、曇りが晴れていく。「浄」体の環境が、浄化されていく。「蘇」体が、蘇っていく。私が、蘇ってくる。「笑」体から、笑いが生まれてくる。「美」体が、内側から美しくなっていく。今見てもいい作品だ



相馬悦孝 元会長

と思うけど、いくつか広告のコンテストにも入賞しましたよ。今でも治療院に貼ってくれている先生がいます。それ以外にも、ホームページからダウンロードする普及ポスターなど新しい試みもしましたね。また、広報普及の一環と言えると思う

けれど、厚生労働省に鍼灸師がどういうものか説明するのがたいへんでしたね。ずいぶん顔を出して、いろいろとやりましたよ。

司会 小川先生は日鍼会に「eラーニング」という新しい研修システムを企画・開発されましたが、どのような背景から導入にいたり、今後はどのような発展を期待していますか？

小川 日鍼会もブランドだといわれるけど何がブランドなのかと考えると、日鍼会の会員だったら最低こういうことができる、こういう間違いは犯しません、というのが必要なわけです。それには患者さんに、あなたはこういう状況です、こういうリスクがあります、としっかり伝えられる能力を持たなければいけない。ところが講習会を開くにも地域によってその環境がさまざま。だったら「eラーニング」がいいじゃないかと考えたわけです。そういう意味で「eラーニングを始めた」わけではなくて、やりたいことを実現するその手段が「eラーニングだった」ということになります。著作権の問題とか悩ましいことが多いけれど、まずは基礎となるCFSコースができたので、今後はそれがさらに発展して、日鍼会のブランド化に寄与することを期待しますね。

司会 要先生はまず、理事会体制の見直しを行われましたが、日鍼会の理想的な組織運営についてどのようにお考えですか？

要 前回の19名の理事から今回は理事が15名しかいないので、非常に窮屈な運営をしなければなりません。今までのように、ひとりの委員長がひとつのことをやっていく、という組織では横のつながりを持ってませんでした。理事会自体も年に4回程度、業務執行理事以外はその4回に出て情報をパッと聞いただけで、それでは発言できない理事も多くいました。また、就任間もない理事には発言し辛いという雰囲気もありました。そこで、毎

月の業務執行委員会を理事全員参加型にしてWeb会議をやろうと思ったわけです。そうすると常に情報は月に1回ほど入って来るので会務にも参加しやすいだろうと。しかし、いまだに都道府県代表やブロック代表という意識もみられるので、どこから出ようが日鍼会の理事として全国を考えて臨むよう意識を高めていきたいと思いません。

司会 皆さんが、会長として大切にしていたこと、または、していることは何ですか？

相馬 組織の団結ですね。それには懇親会などの場も利用してコミュニケーションをはかるのは大切だと思います。忌憚のない意見が聞けるというような環境ができてきます。そして、組織の一番下で一生懸命動いてくれる体制のある会は会員も増えるんです。

仲野 私は、鍼灸医療や日鍼会の事業を各方面に伝えることに努めてきました。厚生労働省や国会議員などには意見もぶつけてきましたけど、いろいろと相談もして業界の発展を常に考えていましたね。

小川 どの組織でもリーダーは同じだと思うけど、自分がどういう目標を持っているのか、いわゆるマニフェストみたいなものをまず明確に示して、その経過を逐次報告していく必要があります。日鍼会に置き換えてみれば、それは会員として知りたいところでもあるので、それを「見える化」するよう努めてきました。やっていることは全て、自分は今ここまで来ています、ここまで来ていませんよ、ということをはっきり示すようにしてきました。

司会 要先生は、まさに今、現在進行形ですが、いかがですか？

要 私は、いわゆる調和とか協調といわれるものですね。意見を幅広く聞くと、どうしても集約するのが難しくなってしまうけれど、いろいろな意見があるので全て

に耳を傾けて、齟齬が生じないように判断することにしています。もうひとつは、ボランティア魂のような体質が残っていてそこに頼ってしまうくらいがあるので、そこを改革したいですね。

司会 ここからは皆さんにディスカッション



仲野彌和 元会長

をしていただきたいと思います。まず、現在の鍼灸業界の課題は何だと思いますか？

相馬 宣伝・広告だと思いますね。鍼灸がどんなものか、どういう効果があるのか。そして、どのような患者さんがこれを受けているのか。そんな鍼灸に関わる一部の人のみしか知らない情報を、もっと多くの国民に知らせる必要があると思いますね。

仲野 私は、われわれ鍼灸師自身に原因があると思うんですよ。鍼灸師法ができた時のことを考えると、そもそも国民の声としての高まりが低かったのかもしれない。社会的地位をこれまで以上に確立するには、そこをしっかりと認識したうえで、厚生労働省や国会議員に対してアプローチをしなければいけないと思いますね。われわれを取り囲む関連職種の人たちと一緒に議論し歩めば、必ず道は開けると思います。

小川 先生方がおっしゃることを具現化するにはエビデンスが絶対必要なので、そのエビデンスを取る覚悟がわれわれにあるか、ということですよ。それには、お金はもちろん、かなりのリソースが必要となります。エビデンスがなければ政治家への働きかけすら意味をなしません。

要 それ以前に、鍼灸師の意識ですよ。われわれ業団が長年かけて築き上げてきたことで、会員の皆さんは等しくその果実を得られるわけだけれど、会費が高いから入らないと言われると返す言葉がない。その意識をどう変えるかというのは難しいですね。エビデンスも必要だと思うけれど、日本の鍼灸は群雄割拠でいろいろなやり方があるといいところもあるんですよ。目指すところは治癒、つまり頂上。でも登り口がいっぱいあっていい反面、統合できない。そこをどう折り合いをつけるかというのは難しい問題ですね。

相馬 確かに、いくつかの鍼灸院へ行ってみるとそれぞれにやり方が違う。共通しているのは、もぐさと鍼を使うところだけと思われることがあるかもしれませんが、もっと共通しているところがあるはずなんです。その共通点をまとめていくということだけでも、大きな作業じゃないかと思います。たとえば、自然治癒力を使って回復を求めるとか、それぞれの経験のうえに基づいた治療の方法だとか、その共通項をみつけて国民が納得してくれる情報を発信する必要があるのだと思います。

小川 まさにそこでエビデンスが求められるのです。自然治癒力だとか免疫力の向上だとか言っても、鍼灸師が勝手に思っているだけで、国民の信頼には値しませんからね。そこから始めなければいけないのです。



小川卓良 前会長

相馬 そこまでの期待は、今の鍼灸師のレベルでは難しいですよ。肩が凝った、腰が痛い、施術してもらったら楽になったっていう話はいくらでもあるので、そこをきちんと整理して、症例報告でもいいんじゃないかと思えますけどね。鍼灸師のレベルアップも必要

だとは思いますが、今の鍼灸師をレベルアップするのは難しいので、優秀な人材がこの業界に入ってくれるようになるといいですね。

小川 それは業界が魅力あるものでなければ入って来てくれませんよ。もう何十年間も議論されて来ていることですし。東アジアでは、日本を除いて韓国、台湾、中国の鍼灸師は医師と同等かそれ以上ですよ。特に韓国と台湾は西洋医師よりも上ですからね。収入がいいから社会的魅力度も高い。そういう魅力ある職業であれば必然と優秀な人材が入って来る。だから魅力ある職業にするのが第一です。

要 それはもう制度の違いですよ。

小川 もちろんそうですね。たとえば、鍼灸師が漢方薬を扱える薬剤師の資格を持つようにしていく、というのでも必要だと思います。

要 でも今の学力じゃ難しいですよ。そこをどうするかですね。今の若い人たちはお金儲けに魅力を感じるのですよね。分かりやすいのは、美容鍼とか不妊治療とか。単に流行りに飛びつくのはどうかと思います。40年ぐらい前にも瘦身鍼とか流行りましたよね。医療事故がこわくないのかと心配しますね。特に美容鍼にはそういう危惧があります。きちんとやっているところはいいけれど、2～3日だけの講習会や、ともすると聞きかじりだけで施術に採り入れようとする。

仲野 倫理観がないからね、臨床家として一番大事なことが欠けていると思いますよ。同じ業界の人間として恥ずかしい。

要 日本鍼灸師会は倫理から始めないといけないですね。それがここの結論でしょうか。

司会 鍼灸業界の課題はディスカッションしていただきましたけれども、その環境にあって、日本鍼灸師会はこれからどうあるべきでしょうか？

要 流行りすたりに流されないような教育、いわゆる鍼灸術という、確たるものを考える必要があると思います。

相馬 業界をよくしたいっていう人が集まって来て、みんな代表者を選ぶというような、そういう組織でないと日鍼会は発展しないと思いますね。ひと様のために働こうとか、鍼灸業界のため日鍼会のために力を貸そうとか、そういう気概のある人がきつというはずですよ。

仲野 質を高めるためには少人数になっても構わない。質のいい集団にした方がいいのではないかと、そういう意見も出ていましたね。

小川 そこは悩ましい問題ですね。

仲野 確かに、「量」がないと動かせるものも動かさないのでからね。

小川 もっと会費を安くして多くの会員を獲得する、という考え方もありますけれどね。

相馬 たくさん集まった方が政治活動はしやすいけれど、各省庁との交渉ともなれば、やはり気の利いた優秀な人材が必要です。その辺の折り合いをつけながら進めていく必要がありますね。

司会 では最後に、それぞれにお聞きしますが、皆さんにとって鍼灸とは何でしょうか？そして今後求められる鍼灸師像など鍼灸師に向けてのメッセージをお願いいたします。

相馬 私の生涯をかけた仕事、ということになるんでしょうけどもね。私の鍼灸治療で元気になった、楽になった、良くなったという声がひとりでも多くなるように努力をしてきたつもりです。それがどこまで叶っているのかわかりませんが、自分では自分なりに一生懸命やってきましたというところで満足しています。これから求められる鍼灸師像ですか。少なくとも専門学校じゃなくて大学に昇格、あるいは大学を出た人が入って来る専門学校にする。もしくは、鍼灸師の資格を取るには大学を出ていなければいけないとか、そうしてレベルアップが図られることを期待しています。

司会 仲野先生にとって鍼灸とは何でしょうか？

仲野 鍼灸は人間に対する素晴らしいアプローチをしていると思うのです。たとえば薬や注射で感染症を抑え込む現代医療とは違う。



要 信義会長

現代医療は医療機器が進歩しているから進んでいるように思うだけだね。鍼ともぐさに頼るのも大事だけれども、その周辺にはいろいろなものがありますよ。温める方法だとか、ストレッチや運動をする方法だとか、筋膜に働きかける方法だとかね。そういうものを鍼灸師は嫌がらないで自分のテリトリーに取り込んでいく必要があると思います。

司会 今後求められる鍼灸師像、今の鍼灸師に向けてメッセージをお願いしますでしょうか？

仲野 自分の仕事の周辺のことをもっとしっかりと勉強しなければいけないですね。勉強することは山ほどありますよ。小さくかたまってしまわないで、もっと視野を広げていろいろなことを学んでください。

司会 小川先生はいかがですか？

小川 私は医者になろうと思って医学部を目指していたんだけど、工学部へ進んで、結局は親の職業でもある鍼灸師の道に進みました。結果的に私にとって一生の職業になりました。常に一流の鍼灸師になろうと頑張ってきたので、全然悔いはありませんね。患者さんからいろいろ教わりました。こうやれば病気になるって、こうやればよくなるってか。本当に鍼灸の道に進んでよかったと思っていますよ。今後求められる鍼灸師像っていうと、まさに、鍼灸師がプライマリ・ケアを担うべきと思っています。西洋医学はIPSだとか遺伝子だとか、これからも発展していくでしょう。でも、一次予防がない。そ

れがあるのは鍼灸だけです。病態把握力や鑑別診断力をつけて、鍼灸の周りにおける栄養学やスポーツ学やいろいろなことを学ぶ。そしてプライマリ・ケアである第一次医療を担うべきだと僕は思っています。そこでしっかりとエビデンスを取っていけば、21世紀は鍼灸師の世界になると思っているくらいです。

司会 最後に要先生はいかがですか？

要 鍼灸が持つ希望と可能性ですね。鍼灸師も希望を持っているし、患者さんも希望を持っている。自分が変わることもできるし、患者さんを変えることもできる。可能性がいっぱいあるなと。患者さんと接していると、日々進化をしているように思います。今後求められる鍼灸師像は、自分で工夫をしながらいろいろなことをやっていくことですね。私自身は学会や実技講習に参加しても実際には試さないことの方が多い。自分なりにそれを少しずつでも身につけていけば、もっと変われるところもあるんだろうけど。皆さんには、ぜひ、いろいろ工夫して欲しいと思いますね。医学がどんなに進んでも鍼灸は必要であると思います。むしろ医学が進歩すればするほど。最後に鍼灸師へのメッセージですね。先達の言葉を借りるなら「医は仁ならざるの術」です。「医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す」これですよ。これで締めくくらせていただきます。

司会 皆さん誠にありがとうございました。



左から、児山広報普及IT委員長、小川前会長、要会長、相馬元会長、仲野元会長、大口創立70周年記念事業実行委員長

2021年11月13日(土)
於、ホテルメトロポリタン(東京都豊島区)